

本号のテーマ：「よく生きる」

「よく生きたい」というのは誰もが抱く基本的な願いです。教育はそれに応えることができます。

ある奉仕と献身の生涯について取り上げてみたいと思います。

須藤昭子さんは、自分が身につけたことを役立て、他人のために尽くし続けた人です。奉仕活動を行っている人たちの中では、よく知られた人です。

須藤さんは、1927年に生まれ、医学専門学校を出て医者になります。敗戦直後の1948年の冬、兵庫県西宮の病院を訪ねます。戦争中に放棄され、病院は荒れ果てていました。そこでは、結核治療の病院を再開するために、若いカナダ人のシスターたちが3、4人、泥やほこりがビッシリと固くこびりついた廊下を、熱心にこすって掃除していました。

結核といえば、その頃はまだ治らない病気として恐れられていました。その結核の患者の世話をするために、彼女たちは、太平洋を越えて敗戦で混乱した日本へやってきて、一生懸命、それも楽しそうに掃除していました。

須藤さんは、彼女たちの所属する修道会に入り、その病院で結核の専門医として働くようになります。25年間にわたり働きました。衛生面の改善や医療の発達とともに、日本の結核患者はほとんどいなくなり、ついにその病院も閉めることになりました。

そのような時、ある日、「ハイチの成人の死亡原因第一位、肺結核」という記事が目にとまりました。それを見た瞬間に、「行けば何かできるかもしれない。私はここに行きたい」と考えました。1976年、49歳のときです。修道会に「ハイチへ行きたい」と名乗り出ます。須藤さんは、日本と同じ方法を用いれば、ハイチでも結核を撲滅できると考えていました。

首都から30キロ離れた「国立シグノ結核療養所」へ赴任することになります。ところが、行ってみると、貧しい人々や病んでいる人々がいる奥の一角が療養所でした。「国立」とは名ばかりでした。

医療設備は何もない、診察室も患者のベッドも病室の窓ガラスもない。電話なんてもちろんない、電気も水もない、という状態でした。

この様な中で患者の治療をする一方、各方面への援助を要請しながら、徐々に施設設備を整えていきました。

それから、37年間にわたり、須藤さんはハイチの民衆のために働き続けました。

2013年、86歳、健康上の理由でハイチを去り、日本に帰国し引退しました。

通常の生活をしている私たちが、須藤昭子さんのように生きようと思っても、それはなかなか難しいことです。しかし、須藤さんのような気持ちを、心の奥底に宿して生きていくことは必要なことのように思います。

「教育委員会の動きなど」

1 不登校は乗り越えることができる

3月12日（月）、野沢会館において、チャレンジ教室の終業式が行われました。不登校の経験をし、この教室へ通った生徒7人のうち4人が出席し、自らの経験を語り巣立っていきました。

男子2人女子2人の生徒たちは、それぞれ、チャレンジ教室において、「悩みを乗り越えることができた」「人づき合いに自信がもてた」「夢をしっかりとつことができた」「信頼する友ができた。高校進学目標をもつことができた」と語りました。苦しい時期を経て、そしてお互いがいろいろ抱えていることを認識し合ったうえで、お互いを理解し信頼し、真の友情をはぐくむことができた。また、将来の夢をもつことができた、ということです。

そして、卒業生から、久保田先生と石川先生に対する、客観的で茶目っ気ある観察が披露され、尊敬と愛情にあふれた感謝の言葉が述べられました。

糊澤教育長からは、広中平祐氏の言葉を引用して、「自分の目標にエネルギーを集中し挑戦せよ」と激励の言葉がありました。

2 異色の入学式式辞

4月4日（水）、5日（木）に、市内公立小中学校24校、私立中学校1校において、平成30年度入学式が行われました。

私は、これまで、公立の小学校か中学校の入学式に出席してきたわけですが、今回、初めて、私立の佐久長聖中学校の入学式に出席しました。

初々しく晴れやかではあるけれど、新しい環境にちょっと不安そうな新入生の顔、そして、我が子の成長にうれしそうに輝く父母の顔、どこでも変わらぬ入学式の表情がありました。

佐藤康校長の式辞は、最初の校長講話とも言えるような興味深いものでした。「計画的に物事を行うことを大切にしてください。例えば、ある調査データによると、計画的に学習した者と、一夜漬けで学習した者とのテストの成績はほとんど同じです。しかし一ヶ月後に同じテストを行ってみると、計画的に学習した者は、同じ点数がとれるのに、一夜漬けで学習した者は、全く点がとれなくなります。よい大学へ入るとか、よい会社へ入るとかいったことではなく、より有意義な人生を送るために、計画的に物事を行う習慣を身につけてください。」というものでした。

小学校、中学校へ入学した子どもたちが、一日一日を大切にして、学校での学びや体験の中から多くのことを身につけ、大きな人間に成長していってくれることを願っています。

3 「2, 500冊をのせた新草笛号」出発

4月4日（水）、中央図書館前において、新しい移動図書館車「草笛号」の出発式が行われました。



依田緑新館長のもと、若草色の基調の中に、コスモスプラン「読むこと、書くこと、行うこと」が記された車体が披露され、テープカットが行われました。

昭和47年の初代から数えて四代目。約2,500冊の図書を載せて、市内66ヶ所のステーションを3週間ごとに巡回します。車いすの皆さんに配慮した電動リフト、蔵書検索用のパソコンを装備し、絵本から大活字本をそろえて、子どもからお年寄りまで幅広い年齢層に利用されやすくなっています。

図書館まで出かけられないという方には、是非、新しくなった草笛号を利用していただきたいと感じました。

